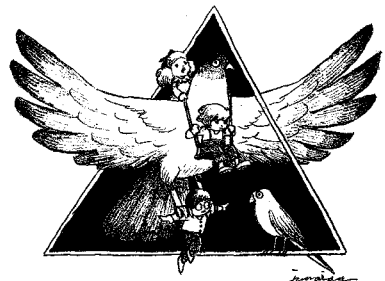


朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のプロローグ 05〉 junaida

うたをよむ 歌が白球を追う時

廣野 翔一

俳句と短歌の流れを辿ると正岡子規に出会う。その子規は野球を愛し、日本の野球の歴史を辿ると出会う存在だ。その三つの歴史が交わる時が来た。年度が変わる3月下旬に俳人・歌人の草野球対決を見てきた。俳人は詠虎巨太軍、歌人は文明レッドライツというチームを組み、グラウンドの上で対峙した。始球式に「ホトトギス」主宰の稲畑廣太郎氏を迎えた一戦は、12対10で詠虎巨太軍が制した。試合後に俳句雑誌「翻車

魚」のウェブサイトに選手たちの俳句・短歌がそれぞれ掲載された。きつとまた発明できる ぼてぼてのゴロはこけたら安打になって 平出奔 流星のようにレフトへ飛んでいく白球 あたふたするしかないな 橋本牧人 グラウンドの上でこける走者や、打球を見送る内野手の姿から、そこにかけがえなき一球があったことを、躍動感をも

って思い込ませる。そして、歌人が白球を追う時、歌もまた白球を追うことができる。自分がグラウンドの内に居るか否かは重要ではなく、グラウンドにて歌を当事者たらしめることが大事である。大瀧和子の第一歌集『銀河を産んだように』には「白球の叙事詩」という連作がある。野球観戦の際の視界や思考が詩化されている。 バッターは打席に素振りす 待つという事は烈しき能動なるを 歌が白球を追いかける瞬間はいくつあっても美しい。子規が味わった瞬間を私たちも何度だって味わえる。 (歌人)

第69回現代歌人協会賞 金田光世さんの第1歌集「遠浅の空」(青磁社)と久永草太さんの第1歌集「命の部首」(本阿弥書店)に決まった。前年度刊行の新人歌集が対象。 第23回前川佐美雄賞 ながらみ書房主催。加古陽さんの歌集「夜明けのニュースデスク」(ながらみ書房)に。第33回ながらみ書房出版賞は藤澤幸男さんの歌集「はる」に。

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が差別する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週一・月曜日まで)。

川野里子選

強まった雨脚直後落雷のように大きな妻天国へ
(広島県) 水野 英明
神の手に洗髪されるときを待つよう不祥事を謝罪するひと
(春日部市) 宮代 康志
万博の心臓だけの心臓が止まったときは死んだというの?
(武蔵野市) 香月真理子
さくら花舞ひ散るコース水鳥のごとゆつくりと行く教習車
(八尾市) 水野 一也
早朝に薔がぶーんぶーん唸っていたそれから午後には桜は咲いた
(滋賀県) 木村 泰景
晩に不如帰鳴き水戸刑務所は豪華な春となりけるかも
(八尾市) 宮川 一樹
スケボーにまたまたこけてまたこけて夕日に光る子のヘルメット
(前橋市) 田村 とむ
入社して一週間で退社する一部始終を見てゐる桜
(横浜市) 滝 妙子
黒ずくめの通勤電車のなかにいて菜の花色の私は旅人
(水戸市) 佐藤恵美子
関税のかかったような価格なりわたしの町でとれたお米は
(金沢市) 竹内 一二

【評】1 首目、臨終の妻は「落雷」だった。存在の大きさが胸に迫る。2 首目、なるほど、神の洗髪を待ったための低頭だ。3 首目、i P S細胞で作られた心臓に死はあるのか? そもそも生き物なのか? 5 首目、咲こうとする桜のエネルギーの優さ。

佐佐木幸綱選

山寺にグランドピアノ届けられ連弾の音の響く本堂
(戸田市) 蜂巣 幸彦
七色のマスク七色のランドセル通学路の子らクレヨンのごとく
(オランダ) 宮沢 洋子
ネズミたち覚悟はよい床下に冬眠明けの青大将入る
(東京都) 岩橋戸代子
紐のように伸びてぐったり屋敷するくちなわ際いで山路ゆくなり
(仙台市) 江川 森歩
父母が配した花が咲いてゆくひとりの実家の七度目の春
(盛岡市) 榎本 拓
猫だけで申間にきた亡き父と彼は親しくしていらしたく
(枚方市) 久保 哲也
塩と御酒に清め拍手打つ夫婦村の田一手に請負ひ耕す
(羽咋市) 北野みや子
泣き叫ぶ我が子を託す朝8時語気を強めて「お願いします」(ひたちなか市) 安澤 美幸
人口が減りゆく島に「甲子園」という活力をくれし香坂高球児よ
(香坂市) 篠崎美代子
生きられるだけは生きよと末期がんやけにウイッグ似合ふ悲しみ
(国東市) 木村 弘治

【評】第一首、山寺とグランドピアノの組み合わせに注目。楽しい音楽が聞こえてくるようだ。第二首、日本よりもずっとカラフルな国。オランダに住んでいたころを思い出す。第三首、冬眠していた蛇たちが起き出す季節である。

高野公彦選

出征兵士あまた送りしわれなれば万歳は耳まで手を上げるのみ
(東京都) 上田 国博
桜なさが家の庭に舞い降りた介護を癒やす五ひらの花弁
(伊予市) 松尾多美子
雪融けの蔵主を五月の王と詠みし山形時代の川野里子氏
(山形県) 南岡 二郎
ゆつたりとくつろぐ鹿に桜散る景色と思ふ麗らかなの文字
(奈良市) 山添 聖子
「柔軟」と自賛してをりトランプは自分の約束自分で破りて
(焼津市) 増田謙一郎
母さんに抱かれて死んだガザの子よシャツの胸にはキティちゃん見ゆ(神戸市) 下山田靖子
鶯が啼けば応へる四十雀森を開きし街のどこか
(横浜市) 白川 修
週末の朝九時プールに満ちている我らシニアの善男善女
(鎌倉市) 半場 保子
「あつぱメ」今年には先に見つけました明日はあなたを納骨する日(春日井市) 神戸 豊子
入学式一年生と手をつなぎ体育館までゆつくり歩く
(奈良市) 山添 聡介

【評】1 首目、悲しい歴史に立ち会ったゆえに、まともな万歳が出来ない悲哀。2 首目、介護疲れの作者を慰めるかのように遠くから飛来した花びら。3 首目、「おもむろにまぼろしをはらふ融雪の蔵王よさみしき五月の王よ」の作を喜ぶ地元の人。

永田和宏選

ぼつりぼつりと夫語り出づ共に見しあの山の月あの湖の月
(京都市) 小西 すす
微笑んでもらえなかつた落胆も余白に残す面会記録
(栃木市) 渡辺 淳
軟ぶべし文明起こり五千年と核ゴミ保管の十万年を
(和歌山市) 吉田 孝
返信をせねばならないスマホなどなかった頃の春の原っぱ
(観音寺市) 篠原 俊則
満開の甲斐蜜吹の桃の山横腹こじ開けリニアが通る
(横浜市) 西前 敦子
團児らの送迎バスを待つよう九十七の父を待つ母
(稲敷市) 坂元 善典
底板をそと沈めて祖母の焚く松葉の香きく風呂の恋しき
(川越市) 齋藤 悦子
おばあちゃん楽しい話は何でも聞きたいからいいんだよそれで
(東京都) 上田 結香
佐良志奈神社の杉間を行けばむらさきのかたかごの花反りて咲きたり(千曲市) 米澤 光人
四月六日朝日歌壇の朝日、川野、佐佐木、高野、永田 国語教育まで沁みて
(大和郡山市) 四方 護

【評】小西さん、二人で見た様々の月をぼつりぼつり語り出す夫。幸せとはそのような時間の記憶を共有することでもある。渡辺さん、老いた親であろうか、面会に行っても自分を認識してくれなかつた落胆が余白の白に残る。十首目、なるほど!